

# Urban Design Lab. Magazine

2014.08.28 vol. 220



## 夏の振り返り特集

LOOKING BACK ON THE SUMMER SEMESTER

過去を振り返るということ p.2

研究室メンバーの振り返り p.3

東京大学  
工学部都市工学科 /  
工学系研究科都市工学専攻  
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：高梨 遼太郎

編集委員：道喜 開視 原由希子 柄澤 薫冬

柴田 純花 中村 奈菜美 益邑 明伸



▲ルンビニにて第二期 JFIT プロジェクト初回会議の司会を勤める西村教授

## 過去を振り返るということ 2014 年夏学期を振り返って

Looking back on the past, the summer semester 2014

# 75

マガジン初の試みとなる「夏の振り返り特集」。まずは西村教授に2014年夏学期の振り返りを行っていただきます。

\*

ほぼ1年中途切れなく仕事をしている身にとって「夏学期の振り返り」の原稿を求められるのは、むしろ新鮮な驚きです。学期で区切って振り返るという発想がなかったからです。

ということであらためてこの夏学期(4月から8月まで)を振り返ってみると、本務としてやったという実感があるのは「都市保全計画」の講義です。研究室が異なる先生との最大の接点は講義だったという私自身の学生時代の体験から、毎回の講義を大切にしたいと常々思ってきました。毎回講義の感想や質問を書いてもらい、それに沿って毎年少しずつ改善もしてきています。毎回の講義に50人前後の学生諸君が出席してくれ、その数は最後まであまり減りませんでした。講義で言いたかったのは、都市に関わる仕事は面白いし、一生の仕事となり得るということでした。アンケートを見ても、来年も同じような方針で講義をやってほしいとあります。嬉しい反応です。

一日だけこの講義をできませんでしたが(その回は黒瀬助教に代講をしてもら

いました。これも好評だったようです)、それはローマの国際機関イクロムで都市保全の講義を頼まれたからです。世界の19カ国から19人の専門家の受講生に向けて(日本からは文化庁の技官が来られていました)日本の視点から私自身の経験を語ることが、世界の都市保全の講義の一部となるということも嬉しいことでした。

そのほか、三国やルンビニのプロジェクトで研究室のメンバーと一緒にあったほか、特別企画でブータンの文化的景観のWSでも一緒にできたのはいい思い出です。

日常生活のうえでは、一研究者としての日々の研鑽(これにはもちろん研究室の運営も含まれます)のほかに、先端研

所長としての管理業務、キャンパス計画室長としての数多くの建築計画の調整と、三人分の仕事をこなさなければならず、欲求不満がたまります。特に、まちの読み解き方に関しては本にまとめたいと思うてきたのですが、そのための時間を取ることがなかなかできないというのが目下の悩みです。その意味では、総合評価は75点というところでしょうか。

こうして振り返ってみると、やり遂げたことよりもやり残したことへの想いが強くなります。過去を振り返ることが未来へのエネルギーを得ることにつながるとしたら、ひょっとしてこれはとても良い企画なのかもしれません。

\*



◀天井の新しい仕上がりが進む安田講堂。平米100kgだった漆喰仕上げの非常に重い天井を平米15kgの軽いGRCによる天井にやりかえているところ。(2014年7月29日撮影)

次に、研究室の皆さんから寄せていただいた振り返りを、研究、PJ、仕事等のトピックごとに分けて紹介していきたいと思います。

凡例は右図のようになっていて、夏学期の自己評価を100点満点で点数にして評価していただきました。

西村教授がおっしゃっていたように、振り返ることで自分の中で過去に一区切りつけて、それを未来へのエネルギーにできるような企画となればと思います。

(編集：B4 原)

NAME  
名前  
year/post  
学年 / 役職

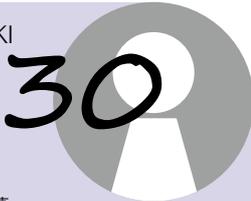
score 

- What did you aim to do at the beginning of the semester?  
夏学期の目標
- What did you accomplish? Why?  
できたこととその理由
- What goals did you not reach? Why?  
できなかったこととその理由

How would you do differently next term?  
来学期の抱負

## Research

Yasuyuki KAWASAKI  
川崎泰之  
D3  
まちづくり大学院

30 

- 査読論文への応募
- 都市計画学会の査読論文を提出できた。(審査が通るかどうかはまだわかりません。)建築学会大会梗概などで少しずつ蓄積があったため。
- 研究を計画的に進めなかったため、ゼミでの発表ができなかった。

予備審査に向けて、研究と論文を進める。

Masaki TAKAHASHI  
高橋正樹  
D3  
まちづくり大学院

50 

- 復興支援の仕事をしながらも、時間をみつけ、デザインガイドラインによる景観形成手法の研究を進めること。
- 研究資料入手の目途がたった。
- 仕事等に時間をとられ、読み込み・分析する時間がとれなかったこと。

定期的な時間をとり、分析をまとめる。

Isamu SUEMATSU  
末松勇  
M2  
まちづくり大学院

30 

- 修士論文の方向性を決めたい。
- 参考文献を数冊読むことが出来た。
- データの集計が進まない。

論文を何とか形にしたい

Fumi NAGAI  
永井ふみ  
D1

100 

- なにより学生生活としての研究活動を楽しむこと。大切にしてきた信頼関係のもとに、仕事としてまちづくりの現場で取り組んできたことを研究として形にしはじめること。今年中に英語論文を書くこと。
- 梗概提出や雑誌への原稿投稿、英語論文執筆…研究室メンバーをはじめとしたたくさんの仲間、思いがけない素晴らしい出会いやコラボレーションのチャンスに恵まれ、思った以上に楽しく願いが叶いました。
- 優先順位を付けて取り組めたので、特になし。

研究の方法論を自分のものとしたい。具体的な成果としては、査読論文を何本か書きたい。

Jiewon Song  
宋知苑  
D2

100 

- To finalise my doctoral research framework.
- Finalised my doctoral research framework. I set myself a deadline and things worked out for the best.
- None.

I do not have things to do differently. Why? That's because "継続は力なり". I just need to keep running.

nadia abdul wahid

50

D1



- I aim to understand the phenomena happening in Malaysia and try to understand the previous studies done in around the world through secondary data. Most importantly, I want to come out with a research framework that would keep me on track throughout the entire process.
- I managed to formulate and plan my research through determining the research aims, objectives, questions, methodology and outcome. A very broad concept and theoretical study was done too.
- I managed to achieve everything. However, it was still up to further refinement. More deliberation should be taken towards the whole research direction.

I would try to take a more detailed study rather than looking at the general and wider spectrum of things.

Rie KYOGOKU

京極理恵

M2

まちづくり大学院

5



- まちづくり大学院で提出する修士論文の、少なくとも半分程度のめどをつける（単独研究）
- そもそも課題設定で行き詰った結果、自分は何をやってきて、これから何をやるのか、やれるのかを、根本から考えたこと。異業種（ジャーナリズム）からきている人間からみて、都市計画とは何か、都市計画から見たジャーナリズムとは何かをキャッチボールのように考え続け、はてさて人間とは何か、まで深く考えることになった。贅沢な思索の時間を得た。なぜ、その課題をやるのか、という理由、自分の限界は次第にはっきりしてきた。
- とはいえ、全く何も形にできていない。調査すら着手していない。それは、社会人としての居場所がほかにあるがゆえの逃避、甘えでもある。また、自分の限界をさらすことへの躊躇もある。時間がないのが2割、残り8割は怠慢である。

行動する。

Morihiro TANI

谷守弘

M2

30



- テーマは仮「宅地規模の大きい郊外住宅地における地域運営の変容に関する研究」来年夏学期までを使って研究をまとめたい。
- この夏学期目標は、既往調査の整理、地域運営の変容に関する実態調査（披露山庭園住宅）比較対象住宅地の地域運営に関する文献調査、補足ヒアリング（田園調布、城南住宅、六麓荘）
- 東大のご縁もあって関係者（東大都市工博士課程修了）にヒアリングを行えた。自治会草創期30年前8年分の業務日誌や検討資料など貴重な資料を入手できた。
- 預かった資料の整理もままならず、仕事や雑用に追われ、その他の目標着手が疎かになってしまった。資料の分析まで至っていない。

日々の生活時間の中で、資料整理、分析に費やす時間確保を心掛けたい。そのため、できるだけ研究会議等に参加してモチベーションを高めていきたい。

Ryotaro TAKANASHI

高梨遼太郎

M2

55



- デトロイトの現地調査を行い、論文の全体像を決める。
- 文献やネット上の資料を元にデトロイトの歴史や計画がどのように行われているのかの基本的な情報を収集することができた。整理はまだもっと行う必要がある。
- 現地調査ができなかった。6月に訪問を計画していた時は他の予定を優先してしまった。8月の計画はあまりにもアポイントがとれずに断念してしまった。そして本当にデトロイトがベストな事例かに自信を持てなかった。

まずはアポイントをもっと必死にとりたい。人づて、電話など。また、研究の優先度を最高に上げて可能であれば他都市との比較も視野に入れながら行いたい。

Takane IMAGAWA

今川高嶺

M1

15



- 修士一年となって初めての学期だったので、目標は研究したいテーマ、明らかにしたいことを決めること、そしてそのテーマの研究の最前線に追いつくということでした。
- 大量の既往研究を読んだり、OGの方にご意見を伺ったりする中で、どういう研究がなされてきたかということは把握できて来たかと思っています。特に既往研究の多い分野だったので、その流れの中で自分のすべき・できる研究が考えられたことは良かったです。
- 研究テーマを調べていく中で自分が何をしたいのか、どういう分野でなにを明らかにしたいのかということがだんだんと分からなくなってしまいました。自分の基礎の部分がまだまだ未熟だったことも分かりました。

来学期はまず初めにいまの研究テーマでまちを調査しながら、自分の修士としての研究テーマをもう一度整理したいです。

Tomoki FUKUNAGA

福永友樹

M1

10



まず自分の興味に立ち返って、その上で修士論文にふさわしい内容のテーマを探すこと。また文献資料を読むだけでなく自ら都市に飛び込み研究活動をする。



卒業研究でできなかったことから何ができるかについて少しずつ探った。



必要な量の時間を割くことができなかった。文献資料を読む以上のことができなかった。

時間をかけ、なんらかの活動に一定の期間携わる形で研究したい。

Shinsuke FUKAYA

深谷信介

M1

まちづくり大学院

85



研究テーマをじっくり考えてみる)



・先生のご指導のおかげで、修論をなんとか執筆！  
・(会社で) 専門組織をつくることができた



・じっくり研究すること

!

Akinobu MASUMURA

益邑明伸

M1

60



漠然とした問題意識を繰り返し述べていた卒業設計の反省から、今特に現代の東京に対して抱いている問題意識や疑問を感覚的な言葉でなく説明したい、そのために手を動かしながら考えなければいけないと思っていた。



インタビューを2件行い、現地調査も行き、手を動かすことに消極的だった去年よりはよかったと思う。また研究室会議やジュリーでは感覚的な言葉を使わないようにし、それゆえに去年のような思っていることが伝わっていない感覚はなかった。



問題意識を的確に表現できるようになってはならず、相変わらず自分の中では漠然としていて、それを具体的な形に切り出すことができていない。そのために必要な作業ができていない気がするが、それがなにかわかっていないような気がする。

何を明らかにしたいのか、具体的なテーマを見たい。

## Project

### 神田プロジェクト Kanda Project

Yukito KARASAWA

柄澤薫冬

M1

30



「神田らしさ」とは何か。神田といえば人間的な魅力だが、空間的にはどこにそれが現れるかを探りたかった。



現状分析を総的にまとめ切ることができたのが大きかった。もう少し綺麗にまとめられるとよいかも。



思ったよりも進まなかった。データが集まれば仮説が導き出せると思いデータを集めた。しかし結局ぼやけてしまっているにもかかわらずそれをまだデータが足りないこととして再びデータを集め、またぶれるという悪い循環に陥ってしまっていた。

自分として「何かを決める」ことが苦手。だからこそデータに頼るうという発言をずっとしてしまっていた。神田プロジェクトを通して「決める」ことをできるようにしたい。

Takane IMAGAWA

今川高嶺

M1

60



今年スタートした、特に何も制約のないプロジェクトだったので、まずは自分たちのリソースを集めながら、神田らしさとは何かというところを探ることが目標でした。



多くの関係者の方のご協力もあり、基礎的な資料は多く集まりました。また、個人的には GIS 等、神田プロジェクトを通じて基礎的なツールの使い方を学ぶことができました。



今振り返ると、神田でこれまで行われてきた調査を網羅的に調べておくということは出来なかったように思います。もう少し今までの調査と対比しながら、このプロジェクトだけが持っている強みのようなものを作っていければと思っています。

神田のアイデンティティの発見と神田プロジェクトのアイデンティティの確立を目指したいです。

## 渋谷プロジェクト Shibuya Project

Kentaro NAKAJIMA

中島健太郎

M1

55



新しくできたプロジェクトということで、今後研究を深めていく土台となる部分をつくること。また、プロジェクトにM2以上の先輩がいなかったため、自分で主体的に動くこと。



4件のインタビューを行い渋谷という地域で行われている防災・減災の実態を少しではあるがつかむことができた。



とはいえ、インタビューにしても、窪田先生・遠藤先生のおかげでできたという印象であり、自ら主体的に動けたとは言いがたい。

プロジェクトの土台を築き、今後の方向性を見据えることとしたい。

Akinobu MASUMURA

益邑明伸

M1

30



東京の移り変わりの激しい場所を扱えるのはいいなという単純な動機でこのPJを選んだ。



MTGやインタビューなどPJの活動はしたが、特になにかできたかと言われると…。



新しく始まったPJでもあり、やりたいことを自由にできる環境の中で、自分がなにをするか考えられていない。MTGでも活動の方針について意見が言えなかった。作業も遅れがちであった。

災害対応のために必要なことだけでなく、東京の繁華街、文化発信地、変化の強い圧力がかかっている街ならではのことを考えたい。

## 佐原プロジェクト Sawara Project

Ryotaro TAKANASHI

高梨遼太郎

M2

75



・旧飯田家(改修された空き家)の活用をし、観光客と住民が接点を持つような観光拠点を試す  
・高校生に主体的にまちづくりに関わってもらおう  
・回遊性と深みのある観光と訪問回数のつながりの関係を調査する。



運が良く、旧飯田家は地方紙にもとりあげられ、多くの人に訪れてもらった。つながりを持った観光客の人もいた。高校生は上手く代替わりもし、主体的に動いている。調査に関しても良いデータがとれた。



戦後などのまちの記憶を住民が伝えるという形でつながりを持たせたかったが、思ったよりも観光客の食いつきが悪そうであった。伝え方が悪かったと思われる。また、実際にいるいると試すことができたが全体像における位置づけを見失っていた感覚があった。回遊性にズバツと答えを出すまで至っていない。

やっていることと、回遊性をちゃんと結びつけるものであると考える今の調査をもうちょっと進めるが、基本はM1を見守りたい。

LEE Minju

イ・ミンジュ

M1

60



佐原プロジェクトへ参加し、論文のテーマを決める。



佐原プロジェクトへ参加し、日本人のまちなかに対する色々な考えをもっと深く理解出来るようになった事だ。祭りの際、参加し、住民と話し合ったのが一番良かったと思う。



まだ論文について不明な部分が多い。具体的にやる事の中で難しい所が多かった。

論文に最も集中し、英語の勉強をする。

Takane IMAGAWA

今川高嶺

M1

70



佐原の魅力、資源、課題を整理する。佐原プロジェクトとしてはさわらぼオープン。この二つが目標だった。



佐原の地元の方にたくさんお会いし、地元の方の目線での佐原の魅力や課題などを整理することは出来た。



さわらぼのオープンでは、地元の方、高校生、観光客、様々な人を巻き込むことができて良かったと思いますが、その一方で調査や交流の場を作るということは十分に達成できなかった。個人的には佐原の歴史をあまり調べることができなかった。

これまで佐原プロジェクトが作ってきた資源をもう一度再整理し、修士として、修士だからできることを実践していきたい。



▲さわらぼの土間で話す住民、観光客、高校生

Misa LEE  
李美沙  
M1

65



☑ さわらぼを住民にとっても観光客にとっても利用しやすいように活用・運営すること。佐高生と一緒に佐原を盛り上げる。プロジェクトに積極的に関わりながら、先輩方のノウハウをできる限り吸収すること。

+ さわらぼに関して、住民・観光客両者から好意的な意見を聞くことができた。佐高生の意見を取り入れた企画や特技を生かした企画等ができ、高校生のまちへの関わり方の一例を示すことができた。参加率という観点からは積極的に関わる事ができた。

- 目標としていた住民と観光客の接点を生み出すことが難しく、実現できなかった。佐高生が継続してまちへ関わられるようなシステムや基盤の整備が不十分になってしまっている。アンケート調査の質問設定の未熟さ。先輩方に頼りきりで自分からはあまり動けなかった。

M1 が主導になるので、佐原 PJ のこれまでの蓄積に恥じないような調査・研究と、実践的な取り組みをしていきたい。

Nobuyuki TAKIZAWA  
滝澤暢之  
M1

73



☑ 佐原というまちを知り、このまちにはどういった良さがある、逆に何が足りないのかを把握する。また、さわらぼを地域に人々に浸透させる。

+ 普段の平日、休日、そして夏の大祭といるいるな期間に何度も訪問し、佐原のハレとケの二つの面を身をもって体験し知ることができた。さわらぼに関してはなんとも不思議な縁というか、思っていた以上に面白い展開が次々とあって今後の期待が膨らむ。

- 現時点ではまだ小野川沿いを中心とした狭いエリアの状況のみでしか佐原をしっかりと見られておらず、もう少し地域全体、さらには千葉県・首都圏全体から俯瞰した佐原の位置付けを把握しておきたかった感否めない。

観光資源の割に観光地として洗練されていないことを逆手にとった佐原ならではの方向性を見出す。さわらぼをさらなる交流拠点に。

## 三国プロジェクト Mikuni Project

Yukito KARASAWA  
柄澤薫冬  
M1

70



☑ 実際に 2 棟の建物をリノベーションする。自分たちの作品が数十年と残るといふ大学では考えられなかった大きな責任を伴うプロジェクトをはじめにあたり、地元の方の意見を聞き、頻りに話し合うことを目標とした。

+ 夏の間に 4 回訪問し、直近にはワークショップを開催した。プロジェクトを共同で進めていく三国側の人たちの声を聞き、ある程度設計の方向性を見いだすところまではできた。

- しかし、地元でまちづくりを積極的に進めていく人と遠巻きに見ている人とは全く意見が異なる。今は積極的に進めていく人たちとしか話せておらず、いかに地元の生の声が拾えるかが課題である。

住民ワークショップを頻りに開催してまちづくりに興味が無い人の意見を積極的に拾い、設計にいかしていきたい。

Shun TAKAHASHI  
高橋舜  
M1

70



☑ (20 世紀都市遺産 PJ も兼ねて) アイデアを空間に落とし込む作業に馴れる。

+ 激動の夏学期を乗り切った自分の身体に 60 点。内容に 10 点 (笑)

- 言い訳はしない。反省は心の中で。

スピード感とクオリティのバランスを見極められるようにする。



▲次期世界遺産と言われるラムグラマ遺跡

ルンビニプロジェクト Lumbini Project

Ryotaro TAKANASHI  
高梨遼太郎  
M2

70



- ☑ To come up with the general ideas of how to create a regional plan for the Greater Lumbini Area.
- + Was able to organize what laws were already in place, plot the structures in the villages, and organize via diagram of how the regional plan should be structured.
- The plan does not seem to be very new, it seems to lean towards what can be accomplished. The initial plan of incorporating the village boundaries in planning was very difficult. Also, there was a lot of miscommunication and misunderstandings inside the group.

I will try to pass on much information as possible to the next student in the project.

Tomoki FUKUNAGA  
福永友樹  
M1

60



- ☑ プロジェクトグループに対して早く貢献できるように以前までの活動記録をよく読むことと、現地調査でしっかりと遺跡の様子や周辺の村や人々の生活についての知見を与えること。
- + 現地調査を二回させていただいたため、ルンビニ以外の細かい遺跡群を巡ることができた。また時間をかけて遺跡に近接する村の建築物や土地割りについての調査を行うことができた。
- 現地の人々を交えたミーティングでは自分の想定を越えた熱い議論が交わされていた。自由な開発を制限されてしまう地元住民と分かり合う難しさを通して、自身の不勉強を強く感じた。

事前準備をより一層丁寧にする。また同様の事例について勉強すること。

清水プロジェクト Shimizu Project

Xu Yan  
D1

50



- ☑ First of all, it is to learn the progress how a project works in Japan and who and how to act their character. Second, to make one plan for this area by reusing the storerooms.
- + Got a lot from the project. Thanks to all the members who are friendly, especially for answering my each obvious questions and explaining each parts of the project and each steps during the progress. And the workshop during the projects gave me new energy to go on.
- The plan. During this half year, i thought a lot about the reason why we are trying to protect and reuse some but not others and at the same time, who can make the decision and who will bear the burden. These thoughts somehow stopped my steps to make a plan out.

Next term i would focus on my research and the projects related to my topic and exchange idea more often. I hope to keep joining some projects and learn more about Japan with better Japanese. Cannot wait for that!



▲念願の赤浜の浜辺で、先輩後輩と

## 大槌プロジェクト Otsuchi Project

Kaiji DOUKI  
道喜開視  
M2



☑ 赤浜地区のcommons空間について、その変遷をまとめ、分析することで、これまでの調査で得られた情報と共に住民の方々に還元すること。そして、今後のまちづくりの参考にして頂くこと。

+ お盆の時期のイベントに合わせて展示を行ったため、赤浜地区の住民の方々への情報還元は、予想していたよりも様々な年齢層の方々にできたと思う。また、地区内でよく使われた場所について戦後から現在まである程度まとめることができた。

— 地区のよく使われた場所に対して、その位置やアクティビティについて時代別に整理することができたが、commons空間としてそれらが被災時に地区にとってどのように活かされたか、今後のまちづくりにどう活かすかの分析があまりできなかった。

今学期で大槌PJは引退ということになりますが、ここで得た経験をできるだけ次世代に引き継ぐことに力を入れたいです。

Akinobu MASUMURA  
益邑明伸  
M1



☑ 大槌との関わりがPJメンバーの中で最も浅い。それゆえに考えられることはないかと思いつきながら参加し始めた。

+ 昔の写真と同じアングルで、現在の大槌の様子を記録するという取り組みを行った。写真を撮るための街歩きや先生や先輩との会話を通じて、地形やかつての街の様子、地名などがある程度体感でき、また知識の引き継ぎのきっかけになったと思う。

— 多大なエネルギーが投入されているが、(繰り返し訪れれば救いたくなるのは当然だが、)被災地や日本全体を考えたときにどれほど有効なことなのだろうかという疑問は解決できなかった。他の被災地等との比較が必要だが、まだできていない。

大槌の相対化やPJの意義はなにかといったことに向き合っていきたい。

Akiho HANO  
羽野明帆  
M1



☑ 今まで先輩方が行ってきた赤浜集落のcommons調査を形にして、地域に還元すること。また、現在の集落の状況を記録するなど、復興計画の工事着手前にできることをやること。

+ commons調査を形にすること、現在の集落の状況を記録することはある程度できた。commons調査は年代ごとにマップに落としてまとめた。また、震災前の写真のうちから何枚かを選び、同じ場所で現在の状態を撮影した。

— 地域に還元することは十分にはできなかったと思う。赤浜集落の盆踊りの際にcommons調査や写真の展示を行って地域に還元できた部分もあるが、今後の赤浜集落の人々の暮らしとの関わりまで踏み込めたらもっとよかった。

新たに分かったことを加え地域に還元する方法を考えたい。特に、工事中や事業完了後に調査したことが生かされる方法を考えたい。



▲赤浜今昔写真の展示

## 浦安プロジェクト Urayasu Project

Chihiro MORIKAWA

森川千裕

M1

40



- ☑ 現地調査などを重ねることで、漁業で生計を立てていた頃のことや、現在の状況・課題などを知り、浦安について詳しくなる。浦安プロジェクトに慣れ、プロジェクトに携わる方々から様々な考え方を吸収できるようにする。都市スケールから詳細部につなげられるように努める。
- + 資料が多く残っているため、少しずつではあるが浦安のことについて分かってきた。外部から見て、浦安の良さがどのようなものなのかを見つけ、変わりゆく浦安で今後どうあるべきか等を深く考えられるように努めることができた。
- (浦安プロジェクトに限るわけではないが) 他のプロジェクトや建築スタジオとの兼ね合いから、要領がつかむことが出来ず、自発的に基礎調査などを進めることができなかった。

路地などの詳細部の調査や、住民の方々のヒアリング調査などを行い、浦安でどうあるべきかを更に深めていきたい。

Misa LEE

李美沙

M1

40



- ☑ 郊外化によりまちが劇的に変容し、木密地域の災害、コミュニティの希薄化、画一化等、様々な問題を抱える中で、どのような調査をし、どう進めていくかを決め、基礎的な部分をおさえること。
- + どのような調査をしていくか、叩き台としての企画はできた。基本的な浦安の変遷過程等、概要は理解できた。
- 叩き台としての案が既にボロボロで、どう進めていくべきかが明らかにできていない。最終的なアウトプットとして市有地の提案をするためには何が必要で、どんな調査をするべきかを踏まえた上での再考が必要である。ヒアリングでは窪田先生に頼りすぎてしまっていた。

最終目標を意識しながら行動する。ヒアリングから何を引き出したかを明確にし、主体的に動いていきたい。

## Studio

Takefumi KUROSE

黒瀬武史

Assistant Prof.

75



- ☑ 3年生の演習は、荒川二丁目に敷地を変更して、密集市街地と都電に囲まれた地区を対象とした。自ら地区の課題を分析し、それを踏まえた開発計画の立案を行うことをこれまでより鮮明に打ち出した。
- + TAの頑張りにより、広範囲の周辺模型が制作されたこともあり、多くの3年生が密集市街地との関係を検討した開発計画を立案してくれた。1/200のスケールで周辺模型を自作した人も数名いた。
- 都市計画道路や災害時の避難など、広域の分析・考え方の整理が必要な施設も計画の対象に含めたが、それらの分析を十分行う時間が確保できなかった。また、地区の課題を分析して、興味深いコンセプトを打ち出した学生も多かったが、コンセプトを空間計画へ明確に反映できなかった計画があった。

時間配分を工夫し、自分の計画全体をレビューする期間を意識的に確保して、コンセプトを計画へ十分反映させるようにしたい。また、エスキースの方法を工夫して、意識的に早い段階で実際の空間計画を始めることで、コンセプトと空間計画がしっかりと結びついたスタジオとしたい。

Akinobu MASUMURA

益邑明伸

M1

50



- ☑ 3月に大槌を初めて訪れたときに復興とは誰のため何をすべきなのかという素朴な問いが浮かんだ。「復興」と専門の異なる人々とともに向き合い自分なりの答えを得たいと思い、「復興デザインスタジオ」を受講した。
- + 建築や社基の学生と話し合いながら一つの提案を作り上げることができた。復興の際に一時的に必要な空間を列挙し、阪神淡路大震災時のその総量を資料を集め示すことで、災害からの復興が単純な線形のプロセスでないというのは実感できた。
- 新しいことが提案できたかと言われると言葉に詰まる。既に言われていることの焼き直しのような気がどうしてもしてしまう。検証も提案も、もっと別の気づきができるようなアプローチが必要だと思った。

専門の異なる人々と真面目な話をする場を、こうしたスタジオ以外にも持ち続けたいと思う。

## Job

Tatsu MATSUDA

松田達

Assistant Prof.

75



☑ 秋から金沢 21 世紀美術館において「3.11 以後の建築」展という展覧会がはじまるが、そのなかで金沢の未来を示す都市的な提案を展示する予定だ。この構想案を具体化することが、夏の目標のひとつである。

+ 展示全体の骨子が定まり、カタログ文章も入稿した。今年度末から北陸新幹線が開通する金沢という街は、まさに変革の渦中にあるが、そのような街に対して、いまできることを具体的な提案として 4 つ盛り込めたことが、大きな進展だと考えている。

- まだ模型や展示パネルは制作中だ。コンセプトは大事だが、絵としていかに多くの人に見て理解してもらえるものとするのか、プレゼンテーションはもっと大事である。展示物自体の制作は、これからはじめる。日程的には、やはりいつもつねにぎりぎりだ。

新国立競技場問題を扱い、榎文彦先生、内藤廣先生をお招きして行う、建築夜楽校というシンポジウムの司会を、ぜひ頑張りたい。

Shin NAKAJIMA

中島伸

Assistant Prof.

90



☑ 抽象的ではあるが、新たに始まるプロジェクトも含めて、自分の研究の可能性を広げること。自分の研究の全体像を深め、さらに構想すること。

+ 4 月当初と比較しても視野が広がった気がする。その契機となったのは、IPHS（国際都市計画史学会）での発表、プリンストン大の上海セミナー参加、神田 PJ の TAT 参加、三国 PJ の地元での議論、20 世紀都市遺産 PJ の渡辺先生との議論。挙げるとキリがない。

- もっと上手くできたと思うことは常にあるので決して完璧ではなかったが、それも含めて得たものは多かった。10 点欠けているのは、今後のノビシロと数年ぶりに風邪を引いたことが半々ぐらい。

広げた可能性を一つずつ成果にしていく。マガジンの締切をちゃんと守る（ごめんなさい）。

Ryohei SUZUKI

鈴木亮平

D3

70



☑（仕事）M2 の時に作った NPO(balloon) の各プロジェクトにおいて、これまで取り組んできたことを発展させる、考えてきたことを実装させること。

（研究）これまで仕事でチャレンジしてきたことを整理し、研究の形にしていきたいこと。

+（仕事）各プロジェクトに予算をつけることができ、実行できている。津和野、香取ではこれまで住民・行政と議論してきたことを実験という形でスタートさせ、柏では、市の仕組み・制度に新しい枠組みを設けた。いわきでは、教育という切り口から新たなチャレンジができています。

-（研究）まだ体系的にまとめるという所に至っていない。。各プロジェクトにおいて、新たなチャレンジができていますので、それらを客観的・学術的視点からきちんと整理したい。

二刀流でがんばります！  
きちんと中間審査まで持っていきたいです。

Jun OHKI

大木淳

M2

まちづくり大学院

50



☑ 横浜、元町地区。都市デザインの専門家として関わること 10 年以上。ここでの地域活動がどのように生まれ、どのように継承されていくか、そのプロセスを明らかにする研究を進めている。現在は収集したデータの分析中。

+ 現在、30 年以上の歴史がある街づくり協定の見直しのために、地元商業団体等との検討会議を継続中。街づくりに関わる団体、個人との交流があるため、情報の収集は比較的容易。

- 横浜市や地元商業団体等の依頼による業務が多岐に渡り、情報の変化に対応するあまりに、分析の糸口やタイミングにブレが生じる。

2015 年中の修了を目指し、研究論文の取りまとめを行う。

Isamu SAITO

齋藤勇

D1 まちづくり大学院

80



☑ 自分が企画した展覧会「シブヤパブリック展～渋谷駅周辺まちづくりと都市デザイン～」第一弾の実施

+ 渋谷駅周辺において、我々が現在行っている各種事業について情報発信し、各方面から評価を受けた。このことは多くの関係者から多大な協力をいただいたことによるものである。

- 博士研究については若干停滞。

「シブヤパブリック展」に集中せざるをえない状況であったこと、また、別の新規事業を立ち上げようとしていることがその理由。言い訳に過ぎないが。。

GSDW2014 とコラボした「シブヤパブリック展」第二弾を成功させる。また新規事業として「シブヤアーバンデザインセンター」立ち上げの予算獲得。併せて博士研究を粛々と進める。

Yuta GENDA

玄田悠太

M2 まちづくり大学院



業務と大学院との両立。



国際文化交流という海外と仕事をする業務をしており、日本の時間通りに進まないことも多々あるが、年度の前半は比較的時間調整がしやすいため、希望する講義をほぼ受講することができた。



大学院では、今期は受講を主としたため、研究活動は不十分であった。研究に繋がるかたちでの効果的な学習を心がけたい。

年度後半となる来学期は前期よりも業務が繁忙になることを想定しているが、効率的に受講し研究につなげたいと考えている。

80



## Others

### Magazine

Ryotaro TAKANASHI

高梨遼太郎

M2

85



ウェブでプロジェクトなどの報告をより自由に行う。紙媒体を研究室内の横糸を通すようなプラットフォームにする。



【ウェブ】多くの記事を多くの写真を用いて掲載できた。  
【紙】より深みのある記事を公表できたと考えている。マガジンを口実に人の話を聞いたり、振り返りをする場を作れた。どちらも M1 の多さに頼っている。



量が増えたことによって読者が減ったのではないと思う。筆者の偏りが(依頼を出しやすい人に)大きい。PJの報告をよりこまめにできているが、PJ間での議論などには発達しきっていないように見える。フォーマットが未完成。英語が少ない。

異なる筆者をできるだけ。修士の人数が減っても持続可能に。抽象化や、横の議論に更に力点をおきたい。

### 学生生活全体

Masahide SHIBUYA

渋谷政秀

M1

55



都市計画分野の基礎をおさえる



いろいろあるけれど、演習に参加したり、ワークショップに参加したりして、設計ってどう考えたらよいか少し理解できたような気がする。



これもいろいろ。原因は優先順位の付け方を間違えた。体調管理が不十分。

最終的に何をしたいのかをちゃんと意識しつつ動きたい。あとは睡眠時間を死守する。

### ダブルスクール

Yukiko HARA

原由希子

B4

80



大学での卒論や講義と、専門学校での授業や課題どちらもいい加減にせず両立させ、どちらかに偏る生活をしないようにする。



4月は専門の課題が思ったより重くて、また夜間の授業で夜遅くに帰って朝早くに大学の講義を受けることに慣れてなくて苦労したが、学期末には慣れてきて課題が多くても手を抜かず乗り越えることが出来た。



早寝早起きの生活リズムが崩れてしまい、朝の講義を休んでしまったことがあった。

生活リズムを整えて、大学の講義も専門学校の授業も無い平日の朝の時間を活用していきたい。

## Information

### 8月のウェブ記事

高校生によるガイドツアー開催！  
10 Days of Thai-Japanese Cooperation for Tsukiji  
内部検討 WS in 三国

是非ご覧ください：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

### 9月の予定

9月8日	卒論会議
9月12日～14日	日本建築学会大会(神戸大)
9月27日～30日	研究室旅行

### \* 編集後記

原由希子

先日、富士山に登ってきました。普段全く運動をしていないので不安しかありませんでしたが、なんとか頂上までたどり着きご来光を拝むことができました。下山して温泉につかりながら、富士山またもう一回登りたいなあなんて思っていた矢先、翌日から立っているのも辛いものすごい全身筋肉痛が始まり、富士山の本当のおそろしさを痛感しました。しばらくは富士登山は遠慮しておきます。